

日中科学技術

No. 49

1986. 2. 20

発行所
日中科学技術交流協会

〒113 東京都文京区湯島1-7-11
南新ビル6F TEL.(03)815-7241

寒牡丹に寄せて

東京大学名誉教授

茅 誠 司

新しい中国大使が日本に赴任された機会に、日本の名所をお目かけようと日中協会の方々と相談した結果、1月の寒さの中でも咲いている鎌倉鶴岡八幡宮の牡丹を見物にゆくことになった。

こちらは道順をよく知っているのですが、12時頃家内と共に到着したが、章曙大使ご夫妻の方は道に迷われて、大分遅れてしまわれた。私は脚が悪いので神宮の中の応接室で大使ご夫妻を待たせて頂いた。この前にある池の周りがこの牡丹園になっていて、見事な太湖石の間に桃色の寒牡丹が静かに咲いていた。

太湖石というのは私共日本人には目立たないものだが、この様に配列してあると実に美しく見える。私の親戚にその専門家がいて大分講義を聞いたがよく判らなかつた。がしかしこの様に寒牡丹の咲いた中に立つ姿は仲々のものであった。

しばらく見たのち宮司さんのご案内で近くの料理屋に昼食を頂きに行った。そこは大変立派なテンプラ店で、品物は様々にありどれも私共には大変な御馳走であった。私は英語は勿論中国語も出来なくて、あまりおしゃべりをしないで黙ってこ

の料理を楽しんでいた。

あとで聞くと、私は脚が悪くてよく歩けず、従って階段を上るのに苦勞していたので、大使はじめ中国の方々は健康も良くないのかと思って心配されたそうである。ところが御馳走はみな平らげたので、茅はお腹の中は心配する必要がないと安心されたという。どうもこれは私としては申し訳ない事であったが、食事もとれない程身体が悪いと受けられるよりは良かったと思ひ、家内から説明を聞いて安心した。

ここにある牡丹も美しいが、東京・上野公園の東照宮にあるのは数も多く特別に美しい。私自身牡丹を20本位持っている。しかし本職はバラで百本位持っているが、年をとったのでその手入れを充分にするのに苦勞している。時々次男が近くにいるのでその一家を招いて手入れをしてもらっているが、仲々思うようにはゆかない。

中国と日本の間の科学技術の交流も非常に大切であるが、この様に園芸などを通してお互をよく知り合うことも大切ではないかと思ふ。

日中交流ニュース

成都生物研究所陳玉谷先生との研究交流

国立公害研究所陸水環境研究室長
須藤 隆一

日中科学技術交流協会に入国手續をお願いした

中国科学院成都生物研究所主任陳玉谷先生が1985年9月24日来日され、研究交流を行なった。陳先生は、環境微生物学を専門とし、とくに廃水のメタン発酵について研究を続けており、日本に

における廃水処理関係の研究および技術の現状を調査されたいということで、京都大学水科篤郎教授の紹介によって、筆者が研究交流をお引き受けした。数回の文書によって訪日計画を決め、入国手続はすべて同協会にお願いした。

9月24日午後成田空港に到着するや否やこれからすぐに研究所を訪問し、嫌気性処理の討論をしたいと、旅の疲れを忘れるほどの熱意を示された。10月3日までの10日間にわたって、環境庁国立公害研究所、工業技術院公害資源研究所、工業技術院微生物工業技術研究所、東京農工大学農学部、下水処理物、し尿処理場、水処理メーカーの研究所などを訪問された。公害資源研究所では公害第3部1課(課長平井正直氏)において、産業廃水の生物処理、微生物工業技術研究所では廃水処理研究室(室長三上栄一氏)において産業廃水の嫌気性処理について、それぞれ討論を行うとともに、研究施設を御案内した。

筆者の研究室においては、難分解性有機物の生分解性について矢木修身主任研究員、嫌気性濾床について稲森悠平主任研究員がそれぞれ説明を行ない、水環境関連施設を御案内した。

筆者の時間的余裕が少なかつたため、下水処理場、し尿処理場など東京近辺の案内はすべて東京農工大学農学部環境保護学科倉石術教授が引き受けて下さった。

英語と漢字での交流であったため、詳細な理解を深めるには十分でないところもあったが、陳先生の来訪、廃水のメタン発酵についての学術交流にきわめて有益であり、日中両国の相互理解と友好親善に貢献があったと確信している。

駐日中国大使館科学技術担当 新旧参事官との懇談

1月7日、前任の余仁泉参事官と新任の張宇傑参事官は交替の挨拶のため協会事務所を訪れ、有山会長、橋口会長代理、窪田常任理事と懇談された。さらに1月18日、改めて余参事官夫人を交え、パークヒルで送別晩さん会を催し、歓談の時を過した。

7日：余先生は、在任中の2年間は仕事が順調に運び、その間協会のシンポジウムや訪日団との会合などに度々出席して、中国に知られた貴協会について心から感銘を受けた思い出が残っている。貴会に対し不十分なところがあったかとの思いは残るが、帰国してからもお役に立つことがあるとも思っている。後任の張参事官は皆様と旧知の間柄なので、大使館との連絡をもっと緊密にされるよう望みたい、と述べられた。

張宇傑新参事官は、1978～83年の間駐日大使館勤務で、北京に帰って2カ年余り交流中心で日本担当の仕事をしてきて、今回着任した。皆様とは全体として古い友人であり、これまで以上にご支援、ご協力を賜りたい。なお、劉伝玉書記官も2月初旬帰国予定である、と述べられた。

有山会長は、余参事官とは折角なじみになって、これからと思っていたので、名残惜しい気がする。我々、手不足がちで気掛りながら十分思ったようにできなかった実情は心残りである。しかし、張宇傑参事官は北京にあっても、日本担当をされた経験もあり、本協会も再出発の段階でいろいろ実情に応じて、ご注意・ご助言と共にご指導ご協力をお願いしたい、と述べられた。

以上は、協会が昨年以来、とくに11月の臨時総会を契機として、積極的な事業転換を図りつつある事情紹介等と併せて語られたものである。

張参事官は、今後、協会との定期的な意見交換を提案され、我々もこれに賛成の意を表した。

18日の集りでは、日中科学技術交流史の一つとして、協会に結集されている先輩科学技術者(中国流に言えば第1梯団ともいうべき、双方の交流が困難な時代に努力された人々)の交流経験をいまのうちに印刷物にする。私は科学技術大学で第1期生として、中国科学技術界の先達の方々の教えを受けた。これらの人々の古い友人である日本の方々、例えば、朝永、坂田、野上先生など既に他界されている。貴協会で何とか印刷できれば、日中双方に有意義なことと思う。

その訳は、第2梯団である55才以上の人々は、

先輩の雰囲気感染して仕事を引継いでいるがしかし第3梯団に属する若い人々には、日中双方とも科技交流の正しい発展に役立つ経験がよく判らないように思われる。話し合っていて、われわれが心配しないでも良いことかも知れないが、そうした記録があれば有益である点は一致した。これを協会の十周年事業に入れられれば望ましいが、常任理事会あたりで検討して見る必要があると答えた。

その他、余参事官が駐米及び訪日の体験を通じて、日本と中国の特別な相互理解・交流の関係をもっと大切に育てたいと意見を述べられるなど、有益な会合となった。

中国機械工業部科学技術情報研究所
機械工業資料調査訪日団との懇談
事務局長 肥後 孝

2月1日(土) 昨年11月25日から本年2月5日の間来日した標記訪日団の李延高団長以下4名の団員と宿舎水月ホテルで以下の懇談を行った。総括意見：訪日前に考えていた資料調査の目的は夫々の訪問先の実情に触れて、理解違いもあったかと思う。経済・産業政策について、理論、システムなど学問的には日中両国の差は少ないが、具体的に(運営方法、進め方など)差があり、それと係わるインフラストラクチャーの違いは大きい。国家の管理・指導と経済政策の進め方では、企業の立場からは、政策実施中に効果が現われなければダメとの考え方が政策の立案・実施の中に働いている。中国の政策立案の参考となりうる。

研究開発、管理、組織、運用という面でも、個々の現実を通して我々の理解は著しく進んだ。

政策立案面で、一つの政策に関係ある企業団体等の意見を集めて案をつくる。法律実施に必要な関係団体を作って、その意見を吸集しながら進めて行くので、受け入れ易く実効が伴う。これらは優れた点と思う。

日本の高度成長期のことは、いまの中国の現状に参考となりうるように思われる。

各種の工業会、総合商社、通産省傘下団体等も

日本の現実の中での存在意義・役割を果たしている。

滞在期間がかなりあったので、2~3時間か数時間で満たせないようなものは、再訪して時間をかけうる機会をもち得た長所があった。また、日本語の話せる者が3人もいて、相手方が話し易い雰囲気であったことも良かったと思う。

図書館・資料室：工業技術院傘下の電子技術総合研、機械技術研究所の図書資料の利用の仕方は、専門家の手許で活用される点は中国も同様である。機械振興協会の経済研究所図書館は同業でもあり、延10日以上訪問利用させて頂き、研究者の意見を伺う機会もあり、今後とも双方の交流活発化に役立つ。国会図書館の特別配慮、経団連図書館の好意、通商産業調査会の史料、日本生産性本部、日本能率協会等の役割理解の資料等貴重な協力に感謝している。

筑波大学図書館の電算機と磁気着脱を利用した最も進歩的な図書管理の技術システムは感心した。日本科学技術情報センターの検索システム、コピーサービス、東洋経済新報、日本経済新報社の刊行物その他、資料収集整備上、今後の研究、検討に待つものも多々ある。

今後の資料調査等には、目的をもっとしぼり、効果的な方法をとる必要が認められる。

地方参観(工場等)：中国新聞社の電算機利用の編集、修正、印刷は出版の将来像を視える。愛知機械トヨタ自動車工場の訪問は大規模、量産体制の中で生産性を高め、コストダウンを図る姿を見た。出光興産愛知製油所では、油臭もなく緑化と環境保全の姿に感銘を覚え、東洋機械金属工場は、トヨタとは対照的な多種・少量生産体制で、NC工作機械、MCによるパーツの素材と設計から産出までの一貫生産体制の現実が大変興味深い感銘を受けた。

日立市の日立工場では、歴史も古い大工場の重電工場で、中国なら500トンクレーンを移動させる大建屋を要する状況を、300トンクレーン2台を組み合せ建屋もそう小さくなくて所要能力を確保している。「高操業率は企業の柱」とのスロー

ガンがあり、高稼働率と自分達所有の企業との考えで、能率とカネの組み合わせで貰われている姿を見た。

積極性と精一杯の能力を生み出すQCの重要性、日本人の仲間意識と運命共同体的な感覚は中国社会の同志的観念とどう違うかなど語り合った。総合商社、シンクタンク：三井物産の情報管理システムと世界中のネットワーク、通信システムが非常に複雑で立派なこと、三菱商事のプラント輸出の例に見る設計から多種技術の組み合わせと何十という生産工場の生産体系の組み立て、そして資金の調達まで面側を見る実情は大いに参考になった。

三菱総合研究所では、研究管理と各項目のチー

ム編成等を伺えればと考えていた。しかし、1人当り研究項目数も多く株式会社システムの中で、高い委託研究費用(1件当何十、何百万円)を払っており、その研究成果も3年以後でないの外に出さない約束とか、中国の体制改革の研究成果が200万円で2百社以上に売れている等の事実を聞いて、資料をあまり頂けないのも仕方はないと考えた次第である。

近日中に帰国するが、各方面の方々からこれほどまでに協力頂けるよう尽力された貴協会の皆様に御礼と心からの感謝を申し述べたい。

岩石力学と地殻物理学の中間領域における訪中学術交流報告

京都大学理学部講師(地球物理学) 田中 豊

1985年11月中国科学院地球物理研究所の招待で、京大工学部斎藤敏明講師と標記の目的で訪中した。まず中間領域という特殊事情に触れたい。

1984年3月、国際岩石力学学会(I SRM)中国国内委事務局長梅剣雲先生(中国科学院地球物理研)から「I SRM日本国内委員会のRock Mechanics in Japan Vol. III 1979, 掲載の貴兄論文“地殻応力場における山はねと水誘発地震の発生機構”に興味をもった。講演と研究上の意見交換のため中国に招待する用意がある。関連論文を送付せう」との手紙を受けた。私は「地殻変動の観測の場でも山はね②、水誘発地震①の現象に遭遇し、故岡行俊先生の指導の下で“地殻応力場③を考慮した発生機構”をまとめたが、岩石力学④は本来の専門ではない。しかしその後も③の研究を進めているので①との係わりは深い。貴兄は②、①、③の何れに興味ありや、場合によっては共同研究者である④の専門家と共に訪中でできれば貴方の要望にも添えるのではないかと。訪問時期は1985年希望」と返信した。

折返し「I SRM副会長陳宗基教授(科学院地球物理研究所長、訪日の際面識あり)と相談の上、

希望に添いたい。当方は②①③と地震に関係した地殻変動の何れにも興味がある」との回答を得た。

そして、'85年5月、中国岩石力学・工学会会長の肩書付で陳所長から私と斎藤講師に「11月に北京(科学院地球物理研)に一週間、武漢(同院岩体力学研)に4日間の日程はどうか」と内報を受けた。しかし、以下の報告のように国家地震局関係の交流が半ば以上を占める実情となった。

この点、今後の交流の参考に若干釈明したい。

私は、1977年の日本地震学会訪中代表団(団長鈴木次郎東北大学教授)の一員として、北京、昆明、西安、上海を歴訪した。その際、中国では地殻応力の測定が地震予知又はTectono physicsの研究のため実施されていることを知り、工学部資源工学教室(当時岡行俊先生、現斎藤敏行講師)の協力の下に地殻応力の研究に着手した。それと共に、北京で中国における地殻応力測定の情報者李方全(国家地震局地震地質大隊)や、地殻変動関係の張国民(現分析予報中心)とも交流を続けてきた。また中国地震考察団の4回に及ぶ来訪、1982年東京開催のI AG, 1985年I A S P E Iの両会議や、日中地震予知シンポジウム

(1984)などで多くの旧友と再会し、新しい友人を紹介され交流範囲も広がっていた。とくに李方全は、'84年の上記シンポジウムと85年3月科学技術庁の招きで来訪し、京都で一週間位旧交を温めている。彼は4月帰国後、地球物理研の梅先生と接触し、上述北京滞在7日の中2日を国家地震局地質大隊訪問に割愛申した由である。私自身は、5月陳所長提案日程に対し、中国の地震多発地域で前回訪問できなかった成都の四川地震局訪問の希望申入(但し費用自己負担)を行っていた。その後何回もの相互連絡の結果、科学院地球物理研の御配慮により私の希望を全てかなえて頂いた。多くの方々にご迷惑をお掛けしたものと思ひ、関係各位のご尽力を深謝致したい。

以下に学術交流の内容を日録として報告する。

- 11月6日(水) 大阪発JAL北京着。中国科学院地球物理研究所鄭建中(東京工大に留学)、車建国(英語通訳)空港へ出迎え。友誼賓館にて北京滞在中の日程、講演題目について打合せ。
- 11月7日(木) 中国科学院地球物理研訪問、陳宗基所長(中国岩石力学・工学会長)と歓談(田中・斎藤共に面識あり)。所内の高温高压岩石試験諸設備を見学し研究者と意見交換。午後北海公園遊覧後北京空港。中国民航で成都着。国家地震局地震地質大隊李方全(老朋友)、四川省地震局李興海(弁公室)、銭洪(地震地質隊)、張定千(第四研究室)出迎え。錦江賓館にて講演と見学のスケジュール打合せ。
- 11月8日(金) 四川省地震局の車で成都北西60kmの灌県へ。灌県地震観測台で江道榮の案内により、地震、地磁気、重力、大地比抵抗の観測計器設備を見学。午後、2200年前の大規模な水利施設「都江堰」を見学。二王廟参観。離堆公園より人工水路「宝瓶口」(水量調節)を見る。成都帰着。夜京劇観賞。
- 11月9日(土) 四川省地震局。田中講演(日本における地殻応力測定成果)。続いて日本の地殻変動観測状況につき自由討論。午後地震局地震測量隊(李建中女史)より鮮水河断層帯の変動

測量と結果の解釈について研究報告。その後、日中地殻変動観測成果につき討論。夜四川省地震局韓渭賓副局長の招待宴(李方全、李興海、銭洪、張定千、李建中、周湘泉同席、於錦江賓館)

- 11月10日(日) 杜甫草堂、武侯祠参観。四川省地震局羅灼礼局長(面識あり)、黄聖陸科学計画処長と歓談(前夜上海より帰成)。午後成都空港発中国民航武漢着。中国科学院岩体土力学研許東俊(東大震研に留学)、李斌(英語通訳)空港に出迎え。晴川賓館では国家地震局地震研徐卓民(第八研究室主任)、劉忠書、曾心伝が待ち受け、地震研での講演を依頼される。岩体土力学研、地震研との間で日程調整あり、1日を地震研訪問に割く。
- 11月11日(月) 岩体土力学研・袁建新所長より研究所紹介、ビデオによる説明。所内実験設備を見学(吳玉山、葛修潤、許東俊氏等案内説明)。午後斎藤講演(岩盤力学における最近の研究成果)、田中講演(応力測定と山はね、水誘発地震への応用)。夜、袁所長による招待宴(朱維申、葛修潤、吳玉山、許東俊、李斌同席、於小桃園)
- 11月12日(火) 国家地震局地震地震研。頼錫安副所長、吳翼麟教授(共に老朋友、今朝上海より帰漢の由)。田中講演(日本の地殻応力測定成果と山はね、水誘発地震の発生子測への応用。移動性地殻変動)。地震研食堂で会食後黄鶴桜と帰元禅寺参観。地震研で研究所紹介のビデオを見た後所内の地殻変動、測量、衛星測地、重力関係の計器と実験設備を見学。夜、頼副所長による招待宴(吳翼麟、徐卓氏、曾心伝、伝明華、羅蘭、および許東俊同席、於東湖賓館翠柳村飯店)。
- 11月13日(水) 武漢発中国民航北京着。梅剣雲中国岩石力学工学会事務長と劉桂英女史出迎え。空港餐厅で会食後友誼賓館へ。講演内容等打合せ。
- 11月14日(木) 科学院地球物理研、斎藤講演(日本における地殻応力測定法)、田中講演(日本における地殻応力測定成果)。午後田中講演

(山はねおよび水誘発地震の発生機構と地殻応力。地殻応力測定結果による地震、誘発地震発生危険度の予測)。夜、陳宗基所長による招待宴(梅剣雲、康文法、石沢全、鄭廷中出席、於致美樓飯荘)。

11月15日(金) 科学院地球物理研。田中講演(大地震前後異常地殻変動、移動性地殻変動、地殻下地震と地殻と地殻変動、活断層付近における地殻変動の観測)。午後、討論。誘発地震および岩石破壊実験とくに三軸破壊後の挙動について、斎藤講師の研究分野に議論が集中した。夕刻、国家地震局地球物理研に陳運泰教授(中国地震学会理事長、旧友)を訪問歓談。夜、地震局地球物理研の高憂生、劉一鳴が友誼賓館に來訪。研究室訪問と会食の要請あり承諾。

11月16日(土) 午前、斎藤は劉女史の案内で頤和園参観。田中はホテルにて休息。午後、田中斎藤、鄭建中の案内で天壇参観。

11月17日(日) 鄭建中の案内で万里長城、十三陵参観。

11月18日(月) 国家地震局地震地質大隊、劉光助副大隊長、李方全。田中講演(地殻応力測定成果と地震危険度の推定。ペルー大地震の発生機構と移動性地殻変動)。斎藤は午前中、地震地質大隊梁海慶の案内で故宮参観。午後、岩盤力学、応力測定、地殻変動に関し自由討論。大隊内応力測定計器と岩石実験装置を見学。夕刻、国家地震局地質研究所に馬瑾教授(面識あり)を訪ね、岩石試験、室内実験設備等を見学。夜、李方全自宅で夫人、令嬢の手料理による歓迎会(地震地質大隊副大隊長劉光助、趙国光、他2名同席)。

11月19日(火) 李方全案内により国家地震局分析予報中心を訪問、梅世蓉主任、張国民、張郢珍、鄭斯華(東北大に留学)(以上いずれも旧知)、劉、楊、朱、梁氏等地殻変動、地殻応力関係者と懇談、分析予報中心の紹介あり、山崎地震(1984)時の異常変動および今回各所で行った講演の概略を説明。梅主任招待による昼食会

(前記7名同席、山東料理店)。なお高憂生の研究室訪問と会食は予報中心よりの交渉で取止めとなる。午後王府井(目的の書店は休日)、友誼商店を訪ねる。夜友誼賓館に陳運泰教授と高憂生來訪。地熱開発のための水圧破碎につき懇談、共同研究と測定計器提供問題につき話し合い。

11月20日(水) 北京空港餐庁で李方全、鄭建中、石沢全と会食。北京発JAL大阪着。

以上のように、科学院招待にも拘らず日程の半ばを国家地震局関係機関訪問に費やすことになり、心苦しい仕儀となった。しかし、科学院と国家地震局の地球物理研は隣り合わせにあり、地質研も同じ建物にある。また武漢の岩体土力学研と地震研は隣りの敷地で5分もかからぬ距離にある。今後の交流は研究分野次第で逆の場合も当然ありうると思われるが、今回は科学院地球物理研および岩体土力学研の御厚意と感謝する次第である。しかし日程はかなり厳しくなった。限られた日数で、有効に各方面との学术交流を行い、今後のための親交を深めることができたと考えている。

交流分野については、当初より明確な指定がなかったが、招待の最大の理由はやはり構造応力場を考慮した誘発地震の解明と発生予測にあったようである。北京の初日と武漢滞在中も中国では誘発地震に関する関心が非常に高いことを再認識した。科学院地球物理研から国家地震局地球物理研が分離して以来、科学院は基礎的研究に重点を置いているものと想像していたが、現実には、中国近代化路線に沿って、国土開発、資源開発の実際面で大いに協力していることを知った。科学院関係の機関は研究費の獲得が困難で、研究者はそれぞれダム建設、地下資源開発等の国家的事業や企業による事業に参加し、調査、計測等の委託研究を受け、それによって研究を進めているというのが実情のようで、岩体土力学研でも同様である。山はね、水誘発地震、応力測定などは、単なる研究ではなく、地震予知と同じく社会的な要請による当面の問題である。

一方武漢の国家地震局地震研究所の8つの研究

室の一つが構造地質とダム誘発地震研究室であって、自然地震の研究室はない。華中、華南の中心部、湖北、湖南、江西省は自然地震が少なく、逆にダム建設が多く、誘発地震が多発している。新豊江ダムなどのようにマグニチュード6以上の地震が発生する危険性がある。したがってこの研究室の目的は水誘発地震の発生機構とその環境条件の解明にあり、現在長江三峡ダムの湛水による誘発地震の可能性などの研究が行われている。山はねや誘発地震は岩盤力学上の問題であると同時に発震機構は地震学、環境条件としての造構応力場は地殻物理学と構造地質学の分野に属する。つまりこれらの分野の学際共同研究によらなければならない領域である。今回岩石力学の専門家である斎藤講師の同行を科学院に申し入れたことは適切であったと考えられるし、今回準備した講演は不十分ながら、先方の要求に合致したもので学术交流の目的は果されたと信じている。

今回は当方からの一方的な講演が多かった。大勢を相手の講演と質疑応答よりも、テーマをしぼり、双方3～5人のパネラーによるパネルディスカッション、とくに我々の研究では、スライド、OHP、黒板等を活用した徹底した討論が今後の学术交流には必要と感じた。

パネラーには、現在第一線にある若い研究者で、同じ問題に取り組んでいてしかもやや専門を異にするメンバー構成が望ましい。つまり、理工学分野では、すでに招かれて一方的に講演をするという時代は過ぎ、交流の形態は変って当然であろう。

1977年訪中の際には、地震予知に携わっている人員の数に驚いただけであった。今回は研究所のスタッフが豊富なことはうらやましく、また脅威をも覚えた。例えば国家地震局地質研究所の馬瑾教授(女性)は20人のスタッフをかかえて研究を進めている。断層の滑動や岩石の変形挙動などを各種の岩石実験やシミュレーションで、また有限要素法を用いて理論的に、それも現地調査の実際に即して、あらゆる面から計画的組織的に問題を追究している。おそらく厳しい討議が行われて

いることであろう。日本の大学の現状ではとても太刀打ちできるものではないことを痛感した。

また、今回各研究所や個人から多数の印刷物を頂いた。これも数例に止めるが、武漢地震研究所編の中国誘発地震(1984)という200頁の論文集には、27編の論文が掲載されている。国家地震局地震地質大隊情報室編の地応力研究文集(1984)は190頁で26編の論文が収められ、これは同大隊の地殻応力班だけの研究成果である。同じく地震研で編集出版している季刊雑誌“地殻形変と地震”は、日本の測地学会誌に相当する内容であるが、年間の掲載論文は50編を越えている。このような限られた分野でこれだけの印刷物が出せるとすると、人口が日本の10倍あるとはいえ研究者層の厚さに驚くばかりである。精密計測器機のある分野を除けば、もはや一方通行では交流は成り立たないと感じる所以である。

今回は老朋友を介して新しい知己を得、飲食を共にしながら談笑し、親交を深めることが多かった。紙面も尽きたので省略するが、新しい交流の糸口がさらに広がり、私達にとっては有意義な訪中であった。中国科学院および国家地震局関係諸機関の御歓迎に感謝すると共に日中学術交流に今後とも努力を惜まないつもりである。また日中科学技術交流協会には、やや特殊な事情に御配慮頂き、御援助を賜ったことに深く謝意を表する次第である。

〔注〕 今回の中国訪問は、費用負担にも頭初の特種事情が反映されている。斎藤講師は、私の同伴者として、渡航費・滞在費とも自己負担(補注を除く)となった。私の渡航費は日中科学技術交流協会から半額援助を受けた。滞在費は、私の希望した四川・成都の宿泊・交通費以外は中国科学院負担(補注を除く)であった。

〔補注〕 国家地震局関係機関は、成都、武漢、北京の両名の滞在費を一部負担したと思われる。

最近の中国科学技術・その他の動向

配列：事項見出（中国通信掲載月日一掲載ページ〔同日掲載関連項目及び件数〕）

- ①今後2年間基本建設投資を厳しく抑制，中国国家計画委（12.13-2~3）
- ②来年から国防研究で契約制導入へ（12.13-4）
- ③86~90年に30の涉外経済法制定へ（12.16-3）
- ④中国の財政収入，昨年比20%増見通し，赤字解消に自信（12.17-8~10）
- ⑤中国農村の第2次改革，好調なスタート（12.18-4~6）
- ⑥中国民兵活動を改革60%削減，“民兵・予備役活動は経済建設に従え”（12.20-2~4）
- ⑦中国の食品工業（機械・紡織工業に次ぐ）第3の大工業に（12.20-8〔工業成長率スローダウン，自動車マクロ管理強化ほか2件〕）
- ⑧大慶油田で圧力密閉コア採取器開発（12.20-12〔石油・エネルギー4件〕）
- ⑨中国で静止画像送受信機開発（12.24-4〔通信3件〕）
- ⑩広州で石油化学エンジニアリング連合体発足（12.24-12）
- ⑪中国航空工業「6・5」期に大きく発展（12.24

- 5~6〔航空2件〕）
- ⑫技術導入契約認可規則（全文）（12.24-13~17）
- ⑬特許代理暫定規定（全文）（12.26-11~13）
- ⑭ポリエステルステーブルプラント，国家検定に合格，国際水準の1.5万トン大型設備（12.30-2~6）
- ⑮中国の家電製品が国際市場に進出（12.30-6~7〔電気製品生産3件〕）
- ⑯漢方のシュヨウ治療薬量産へ，シュヨウ電熱針療法開発（1.7-8~9）
- ⑰水飲んで噴門ガンがわかる。通過各分析診断に成功（1.7-9）
- ⑱中国，植物利用の砂漠化防止で成果（1.9-7~8）
- ⑲港湾建設費（1トン平均2元）26港で徴収，黄交通次官との一問一答（1.9-5~7）
- ⑳ニンニクに抗ガン作用，メルカプト化合物の働き，中国で新鉱物発見，釣魚島石と命名（1.10-12）
- ㉑輸入家庭電器検査管理暫定規則（全文）（1.11-11~13）
- ㉒当面の経済情勢と経済体制改革の問題について中央機関幹部大会での田紀雲演説，上（1.21-2

野上茂吉郎記念交流基金（略称「野上基金」）													
募金の御協力有難うございました											敬称略・受付順 (61年2月15日現在)		
岩田裕吉	小川智哉	坂部知平	中島章	大森莊蔵	亀井理	芦田淳	岩田和子	和田村三郎	坂部貴和子	日本国際貿易促進協会 日本海支局	原田吉之助	本林透	岡林孝郎
森尾節子	平井敦	比田井昌英	会田高陽	吉野正敏	八十島義之助	江沢洋	野上権三	永昌吉	柳井久義	小谷正雄	酒井新二	高橋詢	田中友安
野上三枝子	清水達雄	伏見康治	石川馨	竹田宏	藤井寛治	近璋三	越智勇一	土居養二	亀谷哲彦	押田勇雄	原島鮮	松柳研一	伊藤遊香理
奥山兼孝	坂井光	大浜嘉良	南谷旺伯	横田昌広	滝川秀一	井上智子	高橋直躬	白鳥富美子	上田良二	志水正	西村純成	相秀一	川重樹子
高橋後孝	近藤博	古在由秀	森田隆吉	田瀬清	右井上謙	二見靖彦	肥後孝	伊藤博	橋口隆吉	清	矢板徹	平田道紘	

- ～14)中(1.22-2～11)下(1.23-2～8)
- ㉓中国新技術創業投資公司設立,初のベンチャーキャピタル(1.22-12～13)
 - ㉔外貨獲得へ強力な措置,カラーテレビ・自動車輸入を制限(1.27-5～6)
 - ㉕合弁企業の期間を50年まで延長(1.28-2～3:1.30-3)合弁企業の外貨収支均衡に関する規定公布(1.28-3～5:1.31-9～12)
 - ㉖中国(35種の)漢方生薬の輸出を許可制に(1.28-2)
 - ㉗中国科学院,向こう5年間の研究プラン決める。過去5年間に7,600件の成果,開放政策で活力(1.29-6～9)
 - ㉘中国,初歩的な科学技術情報網形成(1.29-9～10)
 - ㉙中国の兵器工業,5年間に軍民結合型(軍事工業技術の民用移転)の新体制確立へ(1.31-3～4〔軍事工業3件〕)
 - ㉚中国,実用通信放送衛星打上げに成功,ウルムチに地上局完成インテルサットとつながる(4-2～3)
 - ㉛中国でガンの鎮痛・予防新薬開発(2.4-19)
 - ㉜万里,方毅両氏,中国科学院6・5科技難関攻略成果を参観(2.5-3～4)
 - ㉝中国科学院,加速器など大型実験装置建設,同院,初のロボット研究開発基地建設へ(2.5-4～6)
 - ㉞中国でガン治療新薬開発,有効率87.9%(2.5-11)
 - ㉟中西医结合による白血病治療に成功(2.5-11)
 - ㊱32ビット圧縮型スーパーミニコン開発,24字体印字ソフトも(2.10-9)
 - ㊲中国で新式のコンピューター用漢字コード化案(2.10-10)
 - ㊳属性による漢字コンピューター処理基準検討(2.10-11)
 - ㊴北京市エネ技術サービスセンターが力発揮(2.10-17)
 - ㊵中国でティンフリースチールの試作に成功(2.13-15)
 - ㊶急速に発展する漢方医学('82年以降3.5万人約8%増)(2.14-17～18)
 - ㊷河南省で新しい角膜摘出保存技術開発(2.14-18～19)
 - ㊸新生児染色体異常発生率0.73%,湖南医学院が研究成果(2.14-19～20)
 - ㊹雲南で良質のリン酸塩大鉱床見つかる。(2.17-14)
 - ㊺山東大学で高強度のシリコンゴム開発(2.17-15)
 - ㊻中国(海南島)でゴムと茶の混植で成果あげる(2.17-15～16)
 - ㊼林業専門家が自然保護区の拡大提案(2.17-16～17)
 - ㊽長江上流防護林体系工事スタート(2.17-17～18)

中国の'85年科学技術10大ニュース

(中国通信'86.1.7-11頁)

「中国科学技術報」紙は中国の'85年10大科学技術ニュースを発表した。10大ニュースの内容は次の通り。

- ◇葛洲壩二江・三江ダムおよびその水力発電機の完成
- ◇水圧入による原油探掘技術の開発
- ◇黄淮海平原の農業自然条件,天然資源の評価と合理的利用
- ◇1万5000トンポリエスチレンステープル・プラントの設計と建設
- ◇1000万トン級鉄鉱露天掘プラント設備の開発
- ◇科学探査・技術試験衛星の国土資源調査への応用
- ◇漢字用レーザービーム・プリンターの開発
- ◇制御核融合実験装置「中国還流1号」の国家検定パス
- ◇レーザー法ウラン同位体分離の試験成功
- ◇心臓内分泌ホルモンの研究で大きな進展

本号記事索引(頁) 寒牡丹に寄せて・茅誠司
 (1) 日中交流ニュース:成都生物研究所陳玉谷先生との研究交流(1) 駐日中国大使館科学技術担当新旧参事官との懇談(2) 中国機械工業部科学技術情報研究所機械工業資料調査訪日団との懇談(3) 岩石力学と地殻物理学の中間領域における訪中学術交流報告(4) 最近の中国科学技術・その他の動向(8) 野上基金寄附者芳名簿(2・15現在)(8) 中国の'85年科学技術10大ニュース(9) 会告(10):○日中科学技術交流の新段階を迎えて…ご提言・ご希望・ご意見をどうぞ ○本協会諸活動の活性化にご参加を!!
 ○野上基金・募金への御協力お願い

◇ 会 告 ◇

○日中科学技術交流の新段階を迎えて

…ご提言・ご希望・ご意見を…どうぞ
中国は、建国100周年(2049年)には、世界の先進諸国の水準に達すべく、現在けん命に現代化・体制改革に努めています。

1980～85年の第6期5カ年計画(6・5計画)を超過又は繰上げ達成し、さらに'86～'90年の7・5計画に向け、10億人民が一致団結、刻苦精励し、その成功と輝かしい未来図の達成への自信が芽生えています。

昨年、中国共産党中央は科学技術と教育の体制改革を決定し、両改革の緊密な結合と科学技術人材の急速な育成、応用及び基礎科学分野における中国科学院と大学の研究陣営の重要な役割発揮に大きな期待を掛けています。

このような展望に基づいて、日中間の科学技術面の研究連絡、交流合作は、21世紀を目指す新しい発展段階を迎えています。

国際国家、経済大国と言われる日本は、中国のみでなく発展途上諸国の科技人材育成の緊要性に対処すべく、現状の諸体制(来日留学生・研究員受入れ上の宿舎、生活費、研究費、予算、税制、

日本語教育・指導、就業その他法律制度から国民意識まで)には、総合的な改革・改善を迫られる問題が数多く見出されます。

科学技術国際交流の現状に基づく、各位の率直な提案、希望、意見をお寄せ下さい。

○本協会諸活動の活性化にご参加を!!

昨年11月の臨時総会を契機として、これまでの経験を総括し明年末の協会創立10周年を転回軸に、若い科学技術者を含む会員倍増を図り、中国と共に21世紀における科学技術交流・合作の新しい展開を目指す動きが盛り上って参りました。

中国における科学技術及び教育の体制改革の動向に即し、その科技人材育成への協力の積極化を目指し、また境界領域、複合専門のシンポジウムでは両国科学技術研究連絡・協力の新しいシーズを発掘しその健全な発展を促すよう目下鋭意検討中です。公益法人化も検討中です。

これらについても、各位のご支援、ご協力を賜わりたく、会員倍増キャンペーンに応えられ、本会活性化にご参加を懇願いたします。

○以上の①提言、希望、意見②新規会員のご紹介③野上基金の資料請求などに、どうぞ同封の返信用封とう(但し60g以内)をご使用下さい。

中国の科学技術人材育成のために

一人でも多くの方に

浄財のご協力をお願い申し上げます。

「野上茂吉郎記念交流基金」(略称野上基金)発起人(五十音順)

- | | | |
|----------------------------------|---------------------|----------------------------|
| 有山 兼 孝 (名古屋大学名誉教授) | 小沼 通 二 (慶応義塾大学教授) | 伏見 康 治 (参議院議員) |
| 岡本 道 雄 (科学技術会職員) | 近藤 次 郎 (日本学術会議会長) | 藤本 陽 一 (早稲田大学教授) |
| 奥田 東 (京都大学名誉教授) | 高木 佐和夫 (東京理科大学教授) | 向坊 隆 (原子力委員会委員) |
| 越智 勇 一 (麻布大学学長) | 玉木 英 彦 (仁科記念財団常務理事) | 森田 右 (東北大学名誉教授、
法政大学教授) |
| 茅 誠 司 (東京大学名誉教授) | 田村 三 郎 (東京大学名誉教授) | 山口 嘉 夫 (東京大学教授) |
| 久保 亮 五 (東京大学名誉教授、
慶応義塾大学客員教授) | 並木 美喜雄 (早稲田大学教授) | 山下 次 郎 (日本大学教授) |
| 窪田 雅 男 (機械振興協会副会長) | 橋口 隆 吉 (東京理科大学教授) | 和 達 清 夫 (日本学士院会員) |

ご芳志の金額はご自由です。分割でも結構です。ご送金は、次のいずれかにどうぞ。(連絡先下記)

(1)銀行口座 「日中科学技術交流協会野上基金」 (2)郵便振替 東京0-13215
 ○住友銀行御茶の水支店 (普) 312658 「日中科学技術交流協会」
 ○太陽神戸銀行赤坂支店 (普) 3236939 備考欄に「野上基金」とご記入下さい。

なお、1月中旬から、ご紹介頂いた方に野上基金のお願いを夫々お送りしています。2月15日までに、ご寄附頂いた方全員のご芳名は8頁に掲載してあります。改めて心から御礼申し上げます。